

「それだけはダメ。」

作・平野正喜（ひらのまさき）

2018/8/22 版

【登場人物】

- 平尾 56歳。中程度の企業の部長。男。
小夜 24歳。平尾の部署の新入社員。女。
次藤 56歳。平尾の幼馴染。札幌在住。男。
実穂 56歳。同。札幌在住の主婦。女。
五月 40歳。実穂の娘。女。

【本編】

古いワンルームマンションの部屋。

廊下に出るドアがある。

※ドアは開閉音のみ用いるので舞台上にはなくても良い。

セミダブルのベッドと小さいテーブル、椅子2脚がある。

椅子に男物のスエット上下がかかっている。

テーブルの上に携帯電話。

開幕。

漆黒の闇に平尾の独白。

平尾 夢を見ていた。長い髪の女が俺の前にいた。

俺が後ろから抱きしめようとする、女は「おじーちゃん、だめ」と言って振り向いた。

その顔は俺の顔だった。

部屋が少し明るくなる。

ドアの方から光が差し込んでいる。

その先にバスルームがあるようで、シャワーの音が聞こえる。

平尾は全裸でベッドに寝ており、シーツをかけられている。

平尾 ぐあ！（上半身が勢いよく起き上がる）

シャワーの蛇口を締める音と、バスルームのドアの開く音がして小夜の声が聞こえてくる。姿はまだ見えない。

小夜 ど、どーしたの、部長？

平尾 あ…。すまない、夢、見てた。

平尾は周囲を見回し、次に自分の姿を見て、

平尾 すまん、寝てたのか。

小夜 部長ったら、疲れてた？

あの後、寝ちゃったんだよ。

平尾 あ、ああ、そうらしい。うーん。すまん。

小夜 まあ、いいけど。
あ、そうだ、あたし明日から忌引きなのでよろしく。

平尾 ん、ご不幸かい？

小夜 ママのお父さんが札幌にいるんだけど、急に亡くなっちゃったの。脳卒中で。
まだ50代だったのに。逢ったことないんだけどね。

平尾 おやおや、早すぎだよ。ご愁傷様。しかし、50代とは、キミのような大きな孫
がいて…

小夜 (さえぎって) ダメ！ ちゃんと名前で呼んで。お願い。
呼び捨てでいいから。

平尾 あ、ごめん。済まなかった。

小夜 部長って、誰が相手でもきちんと謝るよね。
そういうところソンケーしてるよ。

平尾 え？ あ、そうか、まあ、物心ついてから、50年、謝ってばかりの毎日だか
らなあ。

小夜 えーと、部長は57？

平尾 まだ、56。小夜は24だっけ？

小夜 うん、32歳の別れ、じゃなくて離れだね。

平尾 古い歌知ってるなあ。

小夜 古くないよ、東京事変の曲だもん。

平尾は応えずに自分の下半身をまさぐって、

平尾 あ、

小夜 なに？

平尾 アレ、外しといてくれたんだ。

小夜 あ、コンドームね。うん。しぼんで外れてシート汚したらイヤでしょ、部長も。

平尾、トランクスを履きながら、

平尾 ああ、ありがとう。

小夜 部長って、絶対にコンドームするよね。あたしが大丈夫な日だと言っても。

平尾 ああ、まあ、そうだな…。
そうそう、そろそろウチで部長って呼ぶのはやめてくれないか？

小夜 いいけど、ここでだけ名前で呼んだりしたら、会社で間違っって呼びそうでヤバイ
かも。
あたし、これでも新入社員だし。

平尾 わはは、そうか…。あれ？
小夜 今度はなに？
平尾 そろそろ時期じゃなかった？
小夜 あ、生理？ ちょっと遅れてるみたい。

小夜、OLの通勤服に着替えて髪を直しながら部屋に入ってくる。

小夜 今日帰るね。ママが来るし、明日朝、羽田だから準備しなきゃ。

小夜は平尾のほほにキスをして、

平尾 (ちょっと早口で) 遅れるのは珍しいんじゃないか？
小夜 (とぼけて) 部長って、東京総務部の女子全員の生理周期覚えてるって奈々子先輩
が言ってたけど、ホントみたい。
平尾 (話をそらされたことに気づかず) そこまでじゃないが、何人かは教わってるよ。
こっちから頼んだわけじゃないが。

小夜は部屋を出て玄関に向かいながら、

小夜 まあ、重い子は、上司が理解してくれてると助かると思うけど…。
でも、考えてみると珍しい上司だね、部長って。じゃ、また来週。

玄関で小夜が靴をはく音が聞こえる

平尾 ああ、また。(思い出してドアに向かって早口で) で、遅れてるって？
小夜 あ、先月だったか、寝てた部長を襲っちゃったからかな。
平尾 え？

平尾はベットから跳ね起きて急いで出口に向かいながら、

平尾 おい、まさか！
小夜 へへへ。家族、家族、じゃね。

玄関のしまる音がする。

平尾 おい？

平尾は部屋を出て小夜を追いかけようとするがトランクス一枚の姿なことに気づき、諦めて部屋中央に戻る。

平尾 やれやれ。

平尾の携帯電話が鳴る。

平尾 こんな時間に誰だ。

平尾はケータイを持って画面を見て、

平尾 ん？ 次藤か。

受話ボタンを押し、耳にあてると、電話から次藤の声。

※舞台下手にスポット。

次藤がケータイを耳に当てて立っている。

平尾 もしもし。

次藤 (沈痛に) 元気かい。

平尾 ああ、どした？ 珍しいな。今、札幌か？

次藤 うん。平尾にも知らせた方がいいと思って。

倉枕先輩が亡くなったよ。

平尾 え？ (絶句する)

次藤 やっぱり、知らなかった？

平尾 いつ？

次藤 今朝。脳梗塞。誰からか連絡がなかった？

平尾 来るはずがないよ。

次藤 どうするの？ 通夜は札幌だけど、来る？

平尾 ごめん、ちょっと考える。

次藤 急なことだし、いろいろあったからね。

平尾 ああ…

次藤 実はね、保雄さんから連絡があったときにさ、あ、保雄さん覚えてる？ 先輩の弟の。

平尾 もちろん。昔、いろいろ言われたし。

次藤 うん。で、保雄さんから連絡があったときにね、子供の頃のことを思い出して…、

あんなことになった原因のひとつって、やっぱり僕だったんだろなあと思って。

平尾 あのことか？

次藤 ああ、子供の頃から、平尾とジャレてて、パンツ脱がして、くわえるのが大好きだったこと。

平尾 俺も嫌じゃなかったからなあ。お前はあの頃からそっちの性（さが）だったし。

次藤 でも、実穂の前でもジャレてたのはまずかったと思うよ。今更。

平尾 3人とも片親で、いつも一緒に宿題やってたからな。仕方ないよ。

キンコンという電子音がする。

平尾 ん、キャッチだ。

平尾は携帯電話を耳から話して番号を確認して、

平尾 知らない番号からだから、間違い電話だろ。

次藤 あ、ごめん、実穂だと思うので、出てくれるかい。

平尾 え？

次藤 勝手にごめん。

今日、実穂からも電話貰った時に、平尾に連絡したいというので、教えちゃった。

平尾 …、そうか。

次藤 たのむよ。

平尾 わかった。そういう日なんだな、今日は。じゃ、話してみるよ。

次藤 宜しくね。

※舞台下手のスポットが消える。

平尾は携帯電話を耳から話して、一つため息をついてから終話ボタンを押して、再度耳にあてる。

※舞台上手にスポット。電話台と椅子。実穂が黒電話の受話器を耳に座っている。

実穂 平尾くん？

平尾 …（息をのむ）、あ、ああ、久しぶりだね。札幌からかい？

実穂 …（息をのむ）、うん。ホントに久しぶり。

次藤くんにお願いした時に数えたら40年ぶりだって。

ねえ、聞いた？ウチの人のこと。

平尾 次藤から聞いたよ。ごめん、何と言ったら良いのかわからない…。

それより、こんな電話してて大丈夫なの？

実穂 平尾くんって、思ってたより、声が若いんだね。昔と変わらない。

平尾 身体は老ける一方だけだな。

そうそう、周りに家族とかいるんじゃないのか？

実穂 大丈夫、娘も孫も来るのは明日だし、今、一人だから。

平尾 そっか。

実穂 うん、私の声、覚えててくれた？

平尾 忘れないよ。聞いた瞬間わかった。

でも、見かけはお互いだいぶ変わっちゃったんだろね。

実穂 うん、逢わない方がいいかも。

平尾 ずっと逢いたかったのに。

実穂 私も。ずっと逢いたかったのに。

平尾 急だったの？ 倉枕先輩。

実穂 うん、先週までピンピンしたのに、接待ゴルフの最中に倒れて、そのまま一度も…。

平尾 逢いたかったな。

実穂 うん。時々、平尾くんのこと思い出して心配してたよ。

平尾 謝りたかったな。

実穂 それは、しないでねって言ったと思う、ウチの人。

平尾 そうか。お前はそう思うんだ。

実穂 だめ！ ちゃんと名前と呼んでね。呼び捨てでいいから。

平尾 あ、ごめん、昔、そんな約束あったよな。

実穂 覚えててくれたんだ。

平尾 忘れてた。思い出したよ。あ…

実穂 どうしたの？

平尾 あ、ごめん。ちょっとね…。

実穂 私も忘れてたことがたくさんあるし。

平尾 …。実穂…もか。

実穂 うん、でね、今日、久しぶりに次藤さんと話して、いろいろ思い出したの。

そしたら、平尾くんの声が聞きたくて、聞きたくて、聞きたくて、それしか考えられなくなっちゃって。

平尾 そうか。なんか、嬉しいな。

実穂 でね、謝りたかったの。

平尾 どうして、逆じゃない？

実穂 だって、寝てた平尾くんを襲ったのは私だもの…

平尾 おい！

実穂 …、言っちゃった。ずっと言えなかったこと。

平尾 それは言っちゃダメだって！

実穂 だって、次藤くんがいつも平尾くんのおチンチンくわえてるの見てたから、

平尾 だからダメだって！

実穂 私だってと思っちゃったんだもの！

平尾 ダメだって！

実穂 大丈夫、眠ってるウチの人以外、誰もいないから。

平尾 おいおい…

実穂 あー、スッキリした。私って変なのかも。性（さが）かな。

平尾 …、先輩は知ってたの？

実穂 最後まで言えなかった。

平尾 そうか…。あの日、次藤が置いてった酒を飲んで、やっぱ、高校生のガキが酒飲んじゃダメだよな。

実穂 寝ちゃった平尾くんが可愛くて、私もちょっと飲んでたから、思わず、しちゃった。

平尾 いまさらだけど、聞いていいか？

実穂 何を？

平尾 あの時、痛くなかったの？

実穂 初めてだったけど、あたし、体操やってたでしょ。いつも股割りしてたせいかな。

平尾 オレのが小ちゃくて細かったからかもな。

実穂 (笑)

平尾 目が覚めたら、実穂が乗かってて、あそこが暖かくて気持ち良くて、で、その途端に…、ガマンできなかった。

実穂 …

平尾 怖かったよ、あの頃、毎日。

実穂 ごめんね。

平尾 待っても、待っても、実穂の生理が来なくて、もうダメだと思ったけど、どうしても墮ろしてって言えなくて、

実穂 今更だけど、ごめんね。

あたし、産みたかったの、自分の家族を。

お父さんが弟と妹を連れて出て行っちゃって、お母さんは親せきと仲が悪くて、いとこたちとも会えなくなって…

しかも、あの日、覚えてる？

平尾 何を？

美穂 平尾くんったら、お酒飲んだ勢いで、高校出たら東京に出るんだって言ったじゃない！

次藤くんも引っ越すって言うし、あたし、寂しくて寂しくて気が狂いそうだった。
だから、あんなことを…

平尾 思い出したよ。ごめんな。

そして、実穂のお母さんにバレて、大騒ぎになって、俺が襲ったことにして、
追っ払われて、東京に引っ越して、か。

実穂 うん…

平尾 そうだ、娘だっけ、名前は？今はどこに？

実穂 五月と書いてサツキ。

平尾 サツキ、か。

美穂 ウチの人と合わなくて。

で、実の父親じゃないことを知っちゃって15で家出しちゃった。

平尾 そうか…

実穂 私と同じ16で子供ができて、私にだけ連絡をくれるようになったのは割と
最近のことなの。

平尾 じゃあ、その子は俺たちの孫なのか。

実穂 そういうこと、私はおばあちゃん、平尾くんはおじいちゃんなんだよ。

平尾 ううむ。えーと（年を数える）、その子、もう成人しているのか！

実穂 うん。とっくにハタチ過ぎ。

明日来てくれるので、やっと会えるの。楽しみなの。

ちょっと怖いけど。

平尾 そうか。

実穂 平尾くん、お葬式に来てくれないの？

平尾 ごめん。保雄さんもいるし、よした方がいいと思う。

倉枕先輩は許してくれても、保雄さんはいまだに許してくれてないだろうし。

五月だっけ。その子も俺に逢いたいなんて思っていないだろうし。

美穂 その子って（小さく笑って）、もう40なのよ。

平尾 あ、そうか！そりゃトシ取るはずだよ。

美穂 お互いにね。

平尾 そのうちお墓参りに行くよ。

実穂と五月を引き受けてくれた先輩に、ちゃんとお礼しないと、ね。

実穂 うん…

平尾 行く日決めたら電話するよ。この電話番号でいい？

実穂 うん、待ってる。

平尾 じゃ、切るね。

実穂 必ずよ、必ず電話してね。お願いだから。お願い、絶対…（子どものように泣き出す）

平尾 ああ。

携帯電話を耳に当てたままで、実穂が泣き止むまで待っている平尾。

実穂 (泣き止んで鼻声で) ごめんね。ごめんね…。
(落ち着いて) なんでだろ、あの人が逝っちゃった時はこんなに泣かなかったのになあ。

平尾 ああ…、じゃ、切るね。またね。

実穂 うん。

※舞台上手のスポットを消す。

平尾は電話機を耳から離し、静かに終話ボタンを押す。

その途端に呼び出し音が鳴る。画面を見て、

平尾 ん、小夜？

平尾は息を吐き出して気持ちを落ち着けてから受話ボタンを押す。

※舞台やや下手にスポット。小夜がケータイを耳に立っている。

平尾 (無理に明るく) どうしたの？

小夜 部長一、ママにばれちゃった。

平尾 え？

小夜 アパートに帰ったら、美雪とママが待ってたんだけど、あ、美雪は妹ね。
夕方、あたしと部長が腕組んで歩いてるところ見たっていうの。

平尾 ああ…

小夜 で、不倫じゃないだろねと、問い詰められて、適当にごまかしてたんだけど、
入社式の写真見られちゃって。

平尾 上司だって言ったのかい？

小夜 うん、ちゃんと独身だし、トシはすっごく離れてるけど、あたしオヤジマニア
だしって言ったら、いったん落ち着いたんだけど、

平尾 だけど？

小夜 名前教えろって言われて、部長の名前言ったら、ママの顔が真っ赤になって、
ものすごく怒りだしちゃって、

平尾 え？

小夜 アンタ、なんてことしてくれるのよ！よりによって、こんな男と！
とか叫び出して、揚句にアパートから出ていっちゃった。

平尾 な、なんで？
小夜 わかんないよー。ね一部長、私どーすればいいの？
平尾 うーん、俺にもわからん。

ドアホンの音が連続して鳴る。

平尾 ん、こんな夜中になんだろ。こないだみたいに、近所の酔っ払いが部屋間違っ
たんだろ、ほっとけほっとけ、それよりも、
小夜 (さえぎって) あ、ママからメール来た。え？
平尾 どうした？
小夜 ママ、部長の部屋の前にいるって！ ドアを開けろって部長に伝えてって！
平尾 え、住所も教えたのか？
小夜 教えてないのに！

ドアホンの音がまた連続して鳴る。

小夜 部長、ほんとにごめんなさい。
ママに逢ってくれる？
平尾 わかったよ。俺の責任もあるし。逢っていいんだな？
小夜 うん、お願い。
平尾 じゃ、切るぞ。

※舞台やや下手のスポットを消す。

平尾は終話ボタンをおすと、椅子に掛けてあったスエット上下を慌ただしく着てドアを出て玄関に向かう。

平尾の声 はいはい、今、開ける。

ガチャと鍵を開けドアをあける音がして、玄関から声が聞こえてくる

女の声 アンタね！
平尾の声 鈴木くんのお母さんですか？
女の声 中に入れて！
平尾の声 そうしましょう、近所迷惑だし。

ドアを閉める音がした直後に、平手打ちの音と、平尾が壁にぶつかる音がする。

平尾が勢いでよろめきながら部屋に入る。
後ろから興奮した女が入ってくる。

女 よりによって、小夜の相手がなんでアンタなのよ！
平尾 何を言っているのかわからん！ どうしてここが？
女 調べてたのよ、アンタのことを。そしたら、小夜が！

平尾は体勢を立て直して、女に椅子をすすめる。

平尾 まあ、とにかく、落ち着いてください。
女 落ち着いてなんていられないわ！
平尾 まあ、とにかく…
女 (少し落ち着いて) 分ったわよ。
平尾 何か飲みますか？
女 結構。
平尾 鈴木くんのお母さんですよ？
女 そうよ。倉枕、五月。アンタの娘よ！
平尾 え？ ちょ、ちょっと…
五月 (早口でまくしたてて) 前からアンタのこと調べてたんだけど、
 母さんからお父さんが倒れた、意識が戻らないと聞いて、アンタに一言言いたくなっちゃって、探偵雇って、住所がわかって、お父さんが亡くなったって連絡があって。
 で、札幌から戻ったら、アンタに逢おうと思ってた。
平尾 ちょっ、ちょっと待って！
 じゃあ、実穂の娘と孫って？
五月 (答えずに) そしたら、小夜の相手がアンタだって言うじゃない！

五月、テーブルをこぶしでたたく

平尾 (狼狽して) ま、まさか！それじゃあ…
五月 ウチの大事な大事な小夜をどうしようっての？
 今すぐ別れて！ いいわね？
平尾 ちょっと待って！
 君は、俺の、俺の娘なのか？
五月 母さんとは音信不通だそうだから、知らないかもしれないけど、なんならDNA鑑定でもなんでもしてあげる。

信じられない？

平尾 …（気持ちを落ち着けて）いや、信じるよ。

五月 え？

平尾 さっき、実穂から電話があった。俺たちの娘の名前は五月だと教わった。

五月 母さんから？

平尾 ああ…。そうか、君が俺の娘か。そうか。なんだか不思議な気分だな。

平尾は静かに頭を下げる。

平尾 済まなかった。謝る。

五月 え？

平尾 俺のせいで、先輩…倉枕先輩とは、うまくいかなかったんだってね。済まない。今更だけど謝る。

五月 そんなこと言われても。

平尾 ほんとに済まなかった。

平尾がもう一度ゆっくりと頭を上げる。

五月 なんか、怒りが失せちゃった。帰るね。とにかく小夜と別れて。今はそれだけ。

平尾 わかったから、ちょっと待ってくれ。

五月 帰る。

平尾 そうか、じゃあ、札幌から戻ってきたら連絡をくれ。

五月 ええ、するわ。言いたいことも一杯あるし。

五月は立ち上がり、ドアを向くとそのまま玄関に向かうが、立ち止まり、振り返る。

五月 やっぱり、ちゃんと名前と呼んで。アンタのことは嫌いだけど、それでも名前と呼んで欲しい。

きっと、母さんもそう言ったでしょ。女は名前と呼ばれないと男と向き合ったことにならないって。

アンタにはあたしと向き合う義務があるし、あたしにもきっとある。呼び捨てでもいいから、名前と呼んで。

平尾 え… わかったよ、五月、でいいんだね？

五月 (少しあどけなく) うん。

平尾 来てくれてありがとう。

五月 え？

平尾 ずっと会いたかった家族に会えたんだから。
どんな形でも嬉しいよ、ホントに。

五月、下を向いて独白。

五月 家族。あたしも欲しかった。だから、家出してすぐ、まだ15だったけど、
子どもが欲しくてあんなことに…。

平尾 そうか。

五月、平尾を静かに見つめる。

五月 でも、後悔はしてない。母さんにも、そう話してくる。

平尾 実穂によろしくな。俺も落ち着いたら墓参りに行くからね。
気を付けて行っておいで。

五月、うなづく。堅かった表情が微妙に緩む。それからさっと前を向き、玄関に進む。
玄関が開き、閉じる音がする。

平尾はぐったりと椅子に沈み、携帯電話を持ち、少し考えてからリダイヤルを押す。

※舞台下手にスポット。次藤がケータイを耳に当てて座り込んでいる。そばに酒瓶が転がっている。

平尾 次藤、今いいか？

次藤 ああ、実穂はどうだった？懐かしかったかーい（酔っている）。

平尾 今、ちょっと、話していいか。

次藤 もちろん。

電話くれるかなと、思ってたし。

平尾 大変なことになった。

聞いてくれ。

次藤 なんだ？（酔いが少し覚める）

平尾 さっき、五月が来た。

次藤 え？

平尾 俺と実穂の娘だ。初めて逢った。

次藤 おお！ それじゃあ…

平尾 （さえぎるように）先輩が倒れたと聞いて。俺のことを調べたらしい。

次藤 良かった、んだよな？

平尾 それどころじゃなかった。

次藤 何があったの？
平尾 実は今付き合っている子がな、
次藤 女？ 男？
平尾 女だ。ハタチ過ぎの。
次藤 若いな…。惚れてるの？
平尾 ああ。50半ば過ぎたせいかな、これほど優しい子には、もう2度と出会えないんじゃないかと思うようになった。
俺としたことが、この子と逢えない日は寂しくて、何かあったんじゃないかと不安で仕方がない。笑ってくれ。
次藤 笑わないよ。
平尾 すまん。
で、だ、五月はその子の母親だと言うんだ。
次藤 おい、…
平尾 そう、だったら、俺の孫ということになる。
遥かに年下の女の子に夢中になってたら、実は孫だったというオチだよ。
次藤 間違いないの？
平尾 ああ、さっき腑に落ちたよ。俺がその子にハマった理由も。
次藤 実穂に似てるのかい？
平尾 いや、まったく似てないと思う。まあ、今の実穂の顔はわからないけど。
次藤 じゃあ？
平尾 口癖だよ。口癖が似てるんだよ。俺もボケが始まっているのかな。今日やっと気づいたよ。
お前さ、実穂に言われたことないか、名前と呼んでって。
次藤 え？
平尾 呼び捨てでいいからって。
次藤 覚えがないなあ。平尾だけじゃないの？
ちょっと妬けるな。
平尾 すまん。
次藤 まあ、いいけど。
平尾 実はさ。今日、名前と呼んでって、その子に言われて、次に実穂に言われてさ、最後に五月にも言われたよ。
次藤 そういうことか。
平尾 ああ、それで気づいた。
五月が家出したせいで、実穂とその子は逢ったことがないんだけど、実穂から五月へ、五月からその子へと伝わったのなら納得できる。
きっと、これ以外にも、五月を介して実穂から伝わった何かに俺はハマったんだ

と思う。

次藤 そうか…、その子とは既に？

平尾 ああ、男と女だ。しかも、今日、生理が遅れてると言われたよ。

次藤 ま、まさか…、でも、平尾ってたしか。

平尾 ああ、あれからずっと避妊してきた。

怖いんだよ、冷汗が出るほど。今日は安全日なのよと女に言われると勃たない。

次藤 なら、なぜ？

平尾 襲われたらしい。

40年前には実穂に、そして今度は孫に襲われるなんて、これが俺の性（さが）かよ？

次藤 しかし、…

平尾 そうだよ、もしもできてたら子供は…、

次藤 あ…（息をのむ）

平尾 俺の子で、しかも、俺のひ孫なんだよ！

沈黙

次藤 ごめん、何を言えばよいのかわからない。

平尾 笑ってくれ。

次藤 笑えないよ。

鍵をかけ忘れてた玄関が開く音がする。

平尾 帰ってきたのかな。すまん、また電話する。

次藤 ああ、いつでもいい。いつでも。とにかく、考えすぎないでね。

平尾 ありがとう。ホントに。

※舞台下手のスポットを消す。

平尾が終話ボタンを押すと、小夜が部屋に入ってくる。

小夜 ママが帰ってきたので、ちゃちゃちゃっと横をすり抜けて、ママの乗ってたタクシーに乗ってきちゃった。

ママ怒ってた？

平尾 ああ…。小夜、ここに座ってくれ。話がある。

小夜 何？（平尾の向いの椅子に座る）

あ、あたし札幌行くのやめちゃった。

平尾 おい、それはダメだろ！
小夜 いいのいいの、で、話って？
平尾 あ、ああ、言いづらいことなんだが…、隠すことはできないから、言うぞ。
小夜 うん。
平尾 …。小夜のパママは俺の娘だ。
小夜 え？

沈黙。

小夜 ごめん、もっかい言って。
平尾 小夜のパママの五月の父親は俺だ。
俺が16の頃、札幌に居て、実穂、小夜のおばあちゃんとの間に出来た子が五月なんだよ。
小夜 そ、そんなことって…。
平尾 ごめん。大変なことをしてしまった。
小夜 (明るく) すっごーーい！
平尾 はあ？
小夜 世の中ってせまいんだねー。
ママのホントのお父さんが部長だなんてー。
そんなことアリなの？
すっごーい！
あ、そっか、ママが探してたホントのお父さんって部長だったんだ。
だから、部長の住所をママが知ってたんだね。謎が解けたー！
まさか、こんな、近くにいるなんてねー。
そーかっ、だからあたし…
平尾 (さえぎって) おい！
小夜 え？
平尾 問題はそこじゃないだろ！
小夜 何が？
平尾 (早口に) 俺は小夜という孫とできてしまった。
もし、俺たちの間に子供ができてたら、俺の子で、しかも、俺のひ孫なんだぞ！
小夜 え、なんのこと？
(けろっと) あ、それは大丈夫。うん。
平尾 え？
小夜 アパートでママの帰り待ってたら、生理来ちゃった。
それにね。

平尾 そうか、ふう。そ、それに？
小夜 あたし、部長の孫じゃないもん。
お父さんの連れ子だから。
だから鈴木って苗字なの。
ママと美雪は倉枕。
平尾 おい…。

平尾は開いた口が塞がらない。小夜は元気一杯で。

小夜 だ・か・ら、あたしと部長は血のつながりゼロ。
大丈夫。安心して。
妹の美雪はあたしと同年でママの連れ子、お父さんとママはバツイチ・コブイ
チどうしの再婚。
でも、昨日離婚しちゃったんだって。
平尾 そうだったのか。五月は何も言わなかったよ。
小夜 前から、別れるかもって言われてたし、お父さん、外に女がいるのバレてたみた
い。
平尾 おいおい。
小夜 だから、あたし、部長の子供が欲しいなあって、思っちゃった。
平尾 え？
小夜 お父さんがいなくなったら、ママも美雪も他人になっちゃうと思って寂し
かったの。
お父さんの新しい女になんて会いたくないし。
平尾 そうか、それで。俺を？
小夜 家族が欲しかったの。
未遂に終わっちゃったけど。
平尾 すまん。気が付かなかった。
小夜 ちょっと唐突だったし、無茶なことしちゃってごめんなさい。
あたしって変でしょ、やっぱ。
平尾 いや、変じゃないよ。
小夜 え？
平尾 家族が欲しかったんだって、今日、五月も実穂も言ってたからね。
小夜 え、ママもママのお母さんも？
そうだったんだ…。

沈黙の後

小夜 部長、今度、札幌に連れてって。
お墓参りに行くんでしょ？
ママのお母さんに逢ってみたいの。

平尾 そうか…

小夜 ママは離婚したけど、美雪とあたしのどっちも自分の娘だって言ってくれて、
嬉しいけど、時々うざったいのよね。
お葬式に出なさいって言われたけど、ちょっと、キツイ。
だから、今回はパス。

平尾 そ、そうだな…。

小夜 それにしても…。
あたしが部長を好きになったことも、ちゃんと理由があったんだね。
きっと、ママのお母さんからママに伝わった何かが、ママから私に伝わったん
じゃないかなあ。
オヤジマニアのあたしだって、誰でも良いってわけじゃないから。

平尾 俺も小夜を好きになった理由が一つ分かったよ。

小夜 へへへ。なんか照れるね。
急に嬉しくなってきた、
あれれ…

小夜、涙をぬぐう

平尾 おお。「鉄壁の鈴木」と言われる小夜が泣くなんて、総務の連中が知ったら
ビックリするだろね。

小夜 ひっどーい。
あたしだって泣くことあるよ。
会社じゃ誰にも負けたくないだけ。

平尾 ごめんごめん。

小夜 そっかあ、美雪は部長の孫なんだね、なんかいいなー。
美雪もオヤジマニアだから、部長に逢ったらきっと喜ぶよー。
あ、そっか、部長がママのホントのお父さんなんだから…

平尾 ん？

小夜 あたしも部長をおじーちゃんって呼んでいい？

平尾 それだけはダメ。

暗転・幕

【あらすじ】

平尾は小夜と関係を持っている。情事後で小夜は祖父の葬儀の為の札幌帰郷と生理の遅れを告げて去る。そこに、札幌にいる次藤からの電話があり、先輩の倉枕の急死が伝えられる。倉枕の妻の実穂は16歳の時に平尾の子・五月を生んでいた。実穂の電話で五月の家出を知った平尾に、今度は小夜からママが平尾宅に向かったと連絡が。現れた女は五月と名乗り小夜との関係解消を迫る。五月をママと呼ぶ小夜は自分の孫でないかと平尾は悩む。